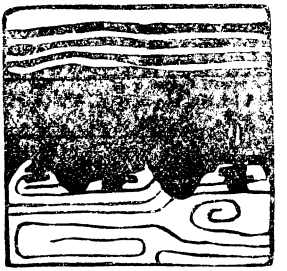


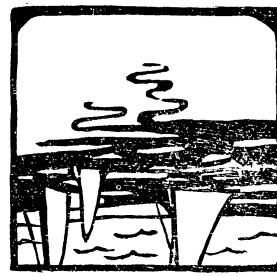
自然と人生

富田海音

照りもせず降りもせずむし暑い日に、山路を辿つて上の山へ登つた途中、汗を拭きながら考へた事がある。

勝れない天氣に自分の考へまでも何んとも云へない陰鬱な思ひに覆はれて來た、登るも進まず下るも欲せず氣儘に考へを足に任せて近々と登つた其の考へは、自然と人生の事を思はせた、今は秋の彼岸で定まらぬ天候である、むし暑い陰鬱な氣は天地に充ちて居る、これが即ち眞理である自然である、此の自然の徵候は吾人に勝ち得ない、然し人生は此の自然の周圍に依つて替る又人情も時處に變換される、これが又人生の持ち前であると博く考へた時、心も少し勇んで來た思はず上の見晴しまで來て心が自分に反つた時、眼下に富士川の白蛇の横たわる樣な景を眺めた、四方の山々に綠翠に仲秋の黃褐の色を交へて居る中にも、黃色な稻田が遙かに散在して見える、富士川の上り舟は秋風に航をかけて銀河の中を登るのである。此の見晴しのよいのと忽ち木葉を縫てて來た冷風とは自然の鬱氣を醫した、呼嗚これも自然の賜物である、眞理に據つて支配された人生の愉快も苦痛も自然に依つて又醫される、そこで人生が自然の何物にか接して種々興味が感ぜらる夏目漱石氏が自然と人生とについて自然の景色に依つて醫し住みにくい世から住みにくい煩を引きぬいて、有難い世界を親りに寫すのが詩である畫である或は音調彫刻である、別に寫さないでもたゞ親りに見ればそこに詩も生き歌もわく、着想を紙に落さずとも鏗鏘の音は胸の裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも五彩の絢爛は自ら眼に映る、たゞ自己の住む世を斯く觀じて、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を淸く麗

しく收め得れば足りる、と云つた。自然は凡て然りである、苦あれば樂あり幸福もあれば又災難もある、此の轉變すを眞理に依つて、善く感ずるも惡く感ずるも、愉快に思ふも鬱氣に悶えるも皆、人生間に於ける意識の働きである。佛敎で煩惱即菩提と云ふと同じてある、吾人は此の自然の理法を巧みに摘んで、又用ひて思慮をよく快せねばならぬ、自然の詩である畫である音樂と聞ゆる鳥の音も、其の趣味は其意義に去られて仕舞ふ、此の妙なる自然を考へた時、自分は前とは一轉して自然の事物に味方され喜んで送られる樣な思ひ非常に愉快に感じつゝ上の山まで着した、仙人の樣な思ひで頂上から瞰した時四方を眺望する事物は悉く俗界を離れて壺快に見えた、登り乍ら考へた煩惱は皆去つて、新しい淸淨界に出入する思ひがして別乾坤に住する、これが自然と人生の支配であると深く感じつゝ書籍を机上に置いた。



反省と努力

廣瀨潮憲

自已の現在狀態に安んじ攷々として其の業にいそしむるものは、通達の人にあらずんば凡愚の徒である、通常水平線上にあるものは何人も、自已の現在狀態に安んぜず「これではならぬ」の感に打たれざるものはない、此の「これではならぬ」の感は直ちに、向上門を開くの鍵となり、自已革新の第一歩となるものである、現在に安んずるものに向上なく「これでよい」とするものに發展はない。世の中は進みつゝある、我は